

四、五日したら、ソ連軍の指揮官がトラックで弥満市

街に来て、家の中の荷造りした品は全部持って行った。

皆、荷物を隠すのに苦労したが、毎日別の車が来て、弥満市街地から、手当たり次第に持って行くので、此の分では永住などむりで、札搭部落まで三里の道を知人の車で荷物運び。この先、岬まで八里、白岩まで三里行くところになり、札搭方面からは岩間があり見えないので、磯舟で荷物を運ぶことにしたが、舟を進ませることが出来ず、丘でロープを引き、竿でかじを取り、岩の浅瀬の所は海に入り引き舟をしたりして、白岩の入り海の所に到着したが、別の組は漁業者で、沖の方から荷物舟で到着した頃は、朝食時でした。午後、沖の方の弥満港に向かう密航船が見えたが、札搭部落からソ連兵に銃撃されて引き返すのを、私共の舟は磯舟で小さく札搭から見えないので沖に出迎えに行った。

お陰様で、白岩の避難者は全員乗船出来たが、一人三百円で、荷物はなるべく少なくというので、我身にかえられず、半分は捨てた。夜、出航し、国境線の四か所の見張りがある中を、小舟のため通過出来て二十年十月一

日無事、手塩港に上陸した。

夜空を赤く染めて炎える豊原を後に

北海道 高橋 敬子

子供の頃からの医者嫌いは五十路も半ばというのに、いっこうに直らない。特に歯痛で七転八倒しながらも歯科医に行く気になれないのは、単に医者嫌いというよりも、あの歯をけずるやすり音がB 29の襲撃音を思い出させる。

終戦当時私共家族は、樺太の内路に居住しており、さほど大きな街ではなかったように記憶しているが、街には憲兵隊があり軍の飛行場があったためB 29の集中攻撃を受けたものと思う。

空が暗くなるほど雨あられと爆弾を投下して行くさまを、防空壕のすき間から息を止めて見ていたことがある。

防空壕の上には敵の目をあざむくのだと、母親がまい

たしゃくし菜が三十センチほどの背丈に青々と繁っていたのが、今も色鮮やかに記憶に残っている。

八月十五日、大人達がラジオの前に集まり正座していた。表情は固く無言である。私もそうせねばならぬような気がして、父親にびったり寄りそって正座した。

幼かった私には内容を理解することはできなかったが、やがて大人達の日に涙があふれ、床にひれ伏し、又床をこぶしで叩きつけ、ただただ茫然と空をにらみ、嗚咽が、号泣が部屋の中に渦巻いた。私はわけがわからぬままとめどなく涙を流した終戦の日であった。

私にとってB29の爆弾は恐怖であったが、子供心に戦争の悲惨さを味わったのはそれからである。終戦を境に多くの避難者が街にたどりついた。息絶えだえの者、下着のままの者、はだしの者、血だらけの者、頭髮が土ぼこりとむしの子（しらみの卵）でまっ白な者……

特攻隊員の中から街の警備に残された父は我が家を開放しその人達に提供した。本国に持ちかえることのできない食糧や衣類である。

避難の途中機銃掃射にあい、姉の背中中の赤子とともに

自分が奇跡的に助かり水だけを飲ませてきたという、泣く気力もない赤子を背負った年若い娘さん。

又足手まといになるからおいて行ってくれと手をあわすおじさん以後髪を引かれる思いで、にぎりめしと水を置いてきたという家族、等々……

母も私も涙でぐしょぐしょ。だがその状況を語る人の目に涙はなかった。人間は、その極限に置かれたとき、涙も心も機能を停止してしまうのであろう。そうして何枚も衣服を重ね着して出て行った。なかには母親の紋付（留袖）を着て行った者もいる。

私共家族が内路の街を後にしたのは、八月二十日どしゃぶりの雨の中、屋根のない貨車であったが終戦からの数日間に、我が家に一時足を止めていかれた人々を、今でも時折り思い出す。

幸運にも大泊より引揚船に乗ることができた。港を出て夜空を赤く染めている方角はソ連軍の爆撃で豊原のまちが燃えているからだと聞いた。